

「対話と実行」座談会 高校との座談会

第1回「高知学芸高等学校」(H22.05.17)の概要

1. 開会

先生： それではただ今より尾崎知事との「対話と実行座談会」を開会いたします。まず最初に本校校長がご挨拶いたします。

校長： 尾崎正直高知県知事が本校においでくださいました。お忙しい中、本当にありがとうございます。生徒諸君、そして教職員、保護者を代表しまして大変うれしく思っております。

さて、尾崎知事については、ご紹介するまでもなく、ご就任以来高知県政のために日々前向きに大変な努力をされ続けております。その一環として、県民目線を忘れないようにと、あるいは地域の要望をくみ上げようということで、地域、グループ、そして学校等々で「対話と実行座談会」をずっと行っておいでます。そして本校でこういう機会が持てたということは、大変うれしいことであります。本来は、本校の中学生から高校生まで全員、1750名に参加をしてもらいたかったんですが、今日は高2、そして生徒会を中心にお話を進めていきたいと思っております。

皆さんにとりまして高知県のトップの方と話ができる、こんな機会はめったにありません。いい時間を皆さん一緒に作りましょう。

先生： それでは、これより司会は生徒会のほうが中心となって進めてまいります。

司会（生徒）： 尾崎知事をはじめ高知県庁の皆様、本日はお忙しい中、高知学芸高等学校にお越しくださり大変ありがとうございます。

それでは知事にお話をさせていただきたいと思えます。よろしく願います。

2. 知事あいさつ

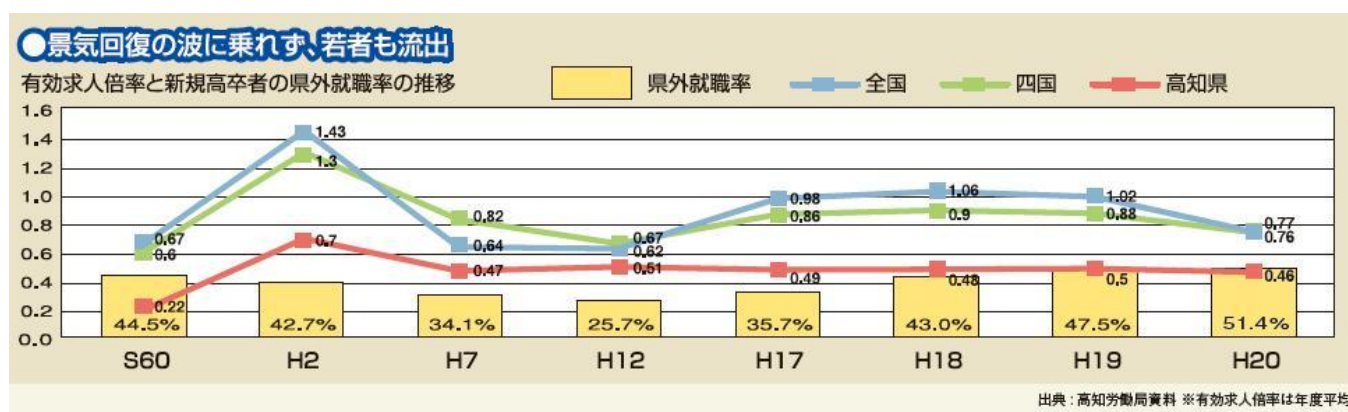
学芸高校の皆さん、「対話と実行座談会」に応募をしていただき本当にありがとうございました。今年度の一番最初にこの「対話と実行座談会」をさせていただくのが、皆さんとの座談会ということになるわけです。私も、今日のご発表について、事前に勉強させていただきましたけど、皆さん、いろんな形で経済のあり様や教育のあり方に非常に興味を持っておられ、しっかりと研究をして、事前にアンケートもとって、いろんな意見を集めて研究しておられ、本当にすごいなというふうに思いました。

【高知の現状について】

まず、私のほうから、高知県の経済が今どういう状況で、どういう課題を抱えているのかをお話をさせていただきたいと思います。

高知県の経済は本当に大変なんです。どれだけ深刻か、そして、どうすればこの状況を脱出することができるかについてお話をしたいと思います。

まず、産業振興計画についてのパンフレットをご覧ください。これは、平成21年度から実施をしている高知県産業振興計画についてのPR版のパンフレットです。



1ページを開いてもらって、その下の折れ線グラフをご覧ください。これは、有効求人倍率についてのグラフです。有効求人倍率とは、1人に対してどれだけ仕事、就職先があるかということを表すものです。有効求人倍率が1を超えると、1人に対して1つ以上仕事があるということです。非常に景気がいいということになります。

グラフのこの赤い線が高知県です。そして、青い線が全国です。平成12年のころ、高知県も全国も大体同じぐらいのところにありました。それが、その後、平成19年ぐらいまでを見ていくと、全国では有効求人倍率1を超えるぐらいまで改善をしていきます。高知県は、この間、ずっと0.5ぐらいで低迷したままです。全国は、平成12年から平成19年にかけて戦後の中でも最も長いといわれる好景気が続いていました。しかし、残念ながら、高知県は変わらないままです。

この約10年前が高知県経済にとってのターニングポイント、分かれ目だったのではないかと私は思っています。それまでは、全国の景気がいいときは高知県もよく、全国が悪いときは高知県も一緒に悪くなり、それを繰り返していました。ところが、平成12年以降は、全国がよくなっても、高知県だけはついていけなくなりました。

なぜこういうふうになってしまったのか。簡単にこういう状況に陥るわけではありません。根本的な構造的な原因が背後にあります。逆に言うと、その根本的な原因に働きかけ、解決するよう

な対策を打たなければ、決して高知県の経済はよくなりません。

今日、皆さんに一番言いたいことは、高知県の経済にしても何にしても、今の現状はどういうことなのか、率直に事態を見極めることが重要だと思います。小手先の対策を取るのではダメだ、根本的な問題があるんだ、それに対して対応するためにはどうするのか。基本的には、まず率直に事態を見据えていくということ、そのことが第1なんだと思っています。

高知県の経済は、率直に言って、景気がいいとか悪いとかいうことを超えた状況にあります。全然浮き上がることができないのです。

どうして高知県だけ浮かび上がることができないのでしょうか？ この緑の線を見てください。これは四国の状況ですが、徳島も香川も愛媛も上向いているんです。高知県だけが上れていない。なぜだと思いますか？

生徒： やる気が無いからだと思います。

知事： やる気がない。ほかにはどういうものがありますか？

生徒： 流出している若者が多いからだと思います。

知事： やる気がないということも、流出している若者が多いということもあるかもしれません。

しかし、その背後にもっと原因があります。要するに、人口が減っているからです。ものすごい勢いで人口が減っています。平成2年ごろから、高知県は人口が減り始めました。全国で人口が減り始めたのは平成17年ごろからですが、その15年前から人口が減り始めたのが高知県です。ピークは84万人を超えるぐらい人口が高知県内にいましたが、今では高知県内の人口は77万人を切っています。

なぜ人口が減り始めたかという、それ以前から若い人が流出し始めていたからです。加えて、生まれてくる赤ちゃんよりも亡くなる人の数のほうが多くなってくる「自然減」が起こるようになってきました。若い人がいなくなると、子どもが少ししか生まれず、亡くなる人の数が多くなります。84万人いた人口が77万人になり、そしてもう1つ、高齢化がどんどん進むようになりました。

人口の減少が、経済にどのようなマイナスの影響を与えるか分かりますか。1人ひとりのご飯を食べる量が変わらず、ただ人口だけが減ると、物の売れ行きは落ちていきます。なぜなら、物を買う人の数が減るからです。それに加えて高齢化が進んでくると、一番お金を使う世代、たとえば子育てをしている皆さんのご両親、保護者の皆さん方の世代。その世代の人口がガンと減ってしまいます。

高知県で売り上げている物の数、平成9年には2兆円でした。今は1兆6千億円しかありません。県内での売り上げが2割も小さくなっています。人口が減っているから、県内の売上げがだんだん落ちていっているんです。

商売がずっとうまくいかず、売上げが前の年より伸びなければやる気もなくなります。職場もなくなるから、若い人も県外へ出て行きますよね。そういう状況があり、だんだん経済規模が縮んできているのだと思います。

では、それに対してどうしていくのかということですが、高知県だけがこんなにひどい状況にあるわけではないんですよ。これから日本全国が同じような状況に陥ってきます。実際、高知県も、平成2年に人口が減り始めてから約10年はそれほど大きなマイナスの影響はありませんでした。10年たって急激に落ち込みが始まってきたのです。そして、全国は平成17年から人口が減り始めています。平成27年ぐらい、10年後には同じように影響が出てくるのかもしれませんが。少なくとも高知県に似たような県、人口が減り始めている県は、徐々に同じような状況になりつつあります。

そういう厳しい状況に、全国の中でも真っ先に突入したのが高知県です。逆に言えば、一番長くこの人口減少と高齢化の苦しみを知っているのが高知県だということです。

真っ先にこれに対する対応策を示すことができれば、後続の県に、高知は問題を克服していうらやましいと、思ってもらえるかもしれない。できれば、高知県をそういう県にしたいと思い、日々頑張っているところです。

【地産外商について】

では、人口が減少し高齢化が進んで県内の市場規模がどんどん小さくなっている状況から、どうすれば抜け出すことができるでしょうか。

要するに、足元の市場が小さくなるのであれば、外からお金を稼いでこないといけません。そして、外からお金を稼いでこれる力をつけなければなりません。今「地産外商」ということを盛んに言っています。「地産外商」というのは、地に産したものを外で商うと書きます。高知県で物を作り、それを県外もしくは国外に持って行きお金を稼いで、そのお金を高知県に持って帰ってくることで、これが「地産外商」です。2割も小さくなっているような県内市場だけに頼っているのでは、どうしてもジリ貧です。外に物を持って行ってお金を稼いでくる力が必要なんです。ただ残念ながら、県外からお金を稼ぐという点においても、高知県は四国の中でも一番の大赤字です。ですから県内市場は小さくなる、外にお金はどんどん取られていっているから、高知県の経済はずっと厳しい状況が続いているのです。だから、そうならないように外に物を売り込んでいこう、そういう「地産外商」の活動を、今、一生懸命進めているところです。

高知県の物を県外へ持って行って売るということに関して、もっとPRすることも必要でしょう。高知県の産物があるかどうかを、知られているか知られていないかで大きな違いがあるときが確かにありますよね。

例えば、私は、この間、デパートに行って文旦の売り込みをやってきました。文旦を大阪のスーパーに持って行ったら、みんな文旦のことを知っているから買ってくれる。ところが、東京に行ったら、残念ながらあんまり売れませんでした。なぜかと言うと文旦を知らないからです。隣に置いてあった愛媛のデコポンのほうがずっと売れていました。だから、もっとPRをして、東京でもどこでも、高知県産品を売れるようにしていくということが重要でしょう。

特に都会の大きな市場になればなるほど、いろいろなものであふれています。その市場で売れるような商品を作るのは大変なことだと思います。1回か2回持って行って売れなくても、くじけないやる気が必要でしょう。

県外に物を売りに行くのに、ものすごく成功している村が高知県の中にあります。馬路村を知っていますね。高知県のものを使って、県外に物を売り込みに行って成功した、第一の事例ですが、今のようになるまでは、実際10年、20年かかっています。現在のJAの組合長さんが一生懸命売り込みをしたが、最初はまったく売れなかったそうです。だけど、売れない中で商品の開発をし、改良をして、現在あれだけ売れるようになってきました。

今、県全体として、この「地産外商」を進めていくために、東京や大阪、名古屋などで、高知県の物を売り込む機会をたくさん作ろうという努力をしています。商談会とか高知県産品フェアなどを開催してもらえるように一生懸命努力をしています。そして、その県産品フェアや商談会で消費者の声を聞いたり、買い取りをしてくれる業者、バイヤー、そういう方々の意見をうかがい、そこで商談がまとまればそれでよし、まとまらなければ次に向けて商品の改良を行っていくプロセスをどんどん繰り返そうとして努力をしているところです。

地産外商公社という法人をつくって、平成21年度は、そういう機会を72件作りました。その前の年が13件でしたから、約5.5倍ぐらいの機会を作って取り組みを進めました。そして、また今年も、そういう機会を作ろうとしているところです。

大河ドラマ「龍馬伝」によって龍馬ブームが起こっていることもあり、いろいろな形で、高知県産品フェアが、東京や大阪のあちこちのデパートで開催されています。大阪のホテルなどで、高知県の産品を使ったディナーやランチのコースを作って、提供してもらい、お客さんの反応から、調理長をはじめとする関係者に「高知県の食材はいいから、日ごろから使いたい」と思ってもらえれば、取引のきっかけができるんだと思います。そういう機会を出来る限り増やしていきたいと思っています。

【産業間連携について】

ただ、そもそも県外に物を持って行って売るためには、もう一段、県内のいろんな業者さん同士で手をつなぎあって、もっといいものを作っていく努力をすることも必要となってきます。

高知県は園芸野菜がすごく強いのは、皆さんご存知のとおりでしょう。高知は一次産業が強い県です。特に園芸野菜は全国でもトップクラスです。

今、野菜の生産量全国1位はどこか知っていますか。答えは千葉県なんです。野菜の生産量全国1位は千葉県、第2位は茨城県です。第3位から5位の間に必ず埼玉県が入っています。

なぜなら、消費地である東京に近く、スーパーなどにすぐに持っていくことができるからです。かつては、東京のスーパーに行っても、高知県産の野菜がずらっと並んでいたけれど、今では千葉県産、茨城県産、長野県産の野菜がたくさん並んでいて、高知の物が少ししか売られなくなってきました。

だから、新しいことを考えないといけません。県外に物を売り込むときには、今までやってきたことを強くして伸ばしていくことも大事ですけど、新しいことを考えていくということも重要になってきます。だから、高知県の一次産業と他の二次産業、三次産業と組み合わせていって、例えば食品加工して、それを県外に売り込んでいくとか、そういう取り組みが、高知県のようなところには、特に必要となってきます。

高知県は、森林面積割合が全国1位で、平野の占める割合が最も小さい。そして、東京まで物を運んでいくにしても、物流コストがたくさんかかります。物が少ししかできなくて、それで運んでいくのにたくさんお金がかかるという中で、それでも一定儲かるようにするためには、売るものの値を高くしなければなりません。高くても売れるもの、買ってもらえるものを作らなければ売れないということです。

物流コストもかかるけど、それだけ高い値段で売れる、そういうものをできるだけ作り出し、産業間での連携を強めていきたいと思います、そういう取り組みをもっと進めていきたいと考えているところです。

【担い手の確保と新分野への挑戦】

先ほどから、高知県は一次産業が非常に強いと話してきましたが、その担い手の数が減っています。それを何とかしなければなりません。そのために、例えば、新しく農業をやりたい人に対して、土地のあっせんをしたり、技術の研修をしたりとか、そういう仕組みを作って、農業とか林業、水産業、これに取り組もうとする人の数を増やそうとしているところです。

それに合わせて、新しい分野、新しい産業分野で、高知県の強みを磨き上げていくことも重要だというふうに考えています。食品加工、健康福祉、天然素材や環境ビジネスなど、こういうものは、高知県にも一定力があって、かつ全国的に非常に追い風の吹いている分野です。こういう分野での企業の取り組みを全面的にバックアップするような努力をしています。

そしてもう1つが、コンテンツ産業。これも高知県にとっては非常に有望な分野じゃないかと

思い、今、伸ばそうとしているところです。高知県は、人口の割に漫画家の数が非常に多いところで有名です。この漫画とコンピュータのソフトとか、さらにもっといろんなコンテンツ関係の産業、映像だったり、音楽だったり色んなものがあると思いますが、こういうものこそ、もしかしたら、高知県のようなところでは非常に有望かもしれないと思っています。

こういうものは、コンピュータでやり取りをするので、場所が遠いとか近いとか、それから行き来が不便だとか、そういうことは関係ないんです。高知のような暮らしやすいところ、休みのときは自然に癒されてもらうという、そういうほうがいいかもしれません。そういう、場所を選ばない産業やコンテンツは、高知県のほうが有利じゃないか。いや、むしろ、高知県にはそういうアイデアを持っている人がたくさんいますということで、今、このコンテンツ産業を伸ばそうと思っています。

【高知県の観光振興について】

最後に、観光の話をしていただきたいと思います。大河ドラマ「龍馬伝」が高い視聴率を得ています。そして全国的にも、龍馬ブームが起きています。それに合わせて「土佐・龍馬であい博」を開催していますが、一昨日（5月15日）までに、まだ会期の3分の1ですが、4つのパビリオンに33万人のお客さんが来てくれました。前の「功名が辻」のときには、年間で26万人のお客さんが来てくれました。今回は、4つのパビリオンに増やしていますが、現在、全部で33万人ですから、かなりのペースでお客さんが来て来ています。

これまでに、高知駅前のメイン会場の隣にある「とさてらす」には、48万人ぐらいお客さんが入ってくれています。これは、都会にある各県のアンテナショップよりもはるかに多い数です。この龍馬ブームで、たくさんの方が高知に来てくれるようになりました。

実際に、高知県内の観光施設には、ゴールデンウィーク期間中は12%お客さんが増えたと新聞に書いていたと思いますが、あれは「土佐・龍馬であい博」のそれぞれのパビリオンを含まない数字ですから、それも入れれば、去年よりも33%増えています。もっと言えば、ゴールデンウィーク期間は、本当は、あまり観光客の伸びを言っても仕方ないんです。むしろ大切なのは、通常だったらお客さんがあまり来ない時期に、前の年に比べてお客さんがどれだけ増えているかということです。それで見ると、この1月から5月までにかけて宿泊客数、入り込み客数は、ともに3割ぐらいずつ、かなりの勢いでお客さんが増えています。

でも、まだ、県内の地域隅々にまでお客さんが行き渡ってはいません。もっと地域にまでお客さんに行ってもらうためにはどうすればいいかということが、一点目の課題だと言えます。

また、龍馬伝の効果があった、なかったというのではなく、龍馬伝の効果、龍馬ブームを生かしたかどうか、非常に重要なんだと思っています。それぞれの地域に観光客が来るかどうか

か。例えば、安芸のパビリオンや岩崎弥太郎の生家には、一日に何千人とお客さんが来てくれていますが、そこから地域に、お客さんをどれだけ引っ張り込めるか、努力をしなければならないと思っています。

そしてもう1つは、この「土佐・龍馬であい博」にしても、龍馬ブームにしても、これを今の時期にどれだけ高知県の物を売り込むための機会として生かせるかということも考えていかないといけません。「土佐・龍馬であい博」は、観光のためだけにやってるわけではありません。むしろ、この機会に、いかに高知県のいろんなものを有名にして、県外に売り込んでいけるようになるか、そのことが一番大事なんだというふうに思っているところです。

そして3番目が、この龍馬ブームが終わった後どうするのか。龍馬伝の放映が終わった後どうしていくのか。そのことについてどう考えるか。そのために今から何をするか。そのことが非常に大きなポイントになるんだというふうに思っています。これは非常に難しく、大河ドラマの放映が終わった年は、大河ドラマが始まる前よりも観光客数を落とすものですが、そうではなく、ビフォー・アフターで比べて、アフターのほうが上に来るためにはどうすればいいのか、ということを考えなければなりません。そのためにはどうしていくか。それが大きな課題です。

PRするときに龍馬を全部捨て去っても多分いけない。だけど、龍馬だけに頼るのもいけないんだろうと思います。そこらあたりが、来年に向けてのさじ加減の難しいところかなと思っています。

【高知の将来のために】

いずれにしても、高知県の経済というのは大変な状況にあります。けど他方、いろんな追い風が吹いています。例えば食べ物がおいしいところ全国1番（大手旅行雑誌のH19年度アンケート結果）だったり、いろんな歴史的な遺産があったり、素晴らしい自然があったり、その強みをたくさん持っているところです。その強みを生かしていきながら、いろんな形で、今ある根本的な課題に正面からぶつかって行って、克服しようと努力をしているところです。皆さんが大人になったときには、もっと良い高知県になっているように、また、皆さんの子どもたちにより良い高知県を残していけるように、全国の中でも最も希望ある県となり得るよう努力していきたいと考えています。是非、皆さんのその若い力と柔軟な発想で、この高知県を切り開いていくためのお知恵を、我々大人にも授けてもらいたいと思うし、それぞれの自己実現をすることがまず第一ですけど、合わせて、故郷に貢献する人材に是非育てていただきたい、そのように思います。

3. プレゼンテーション（生徒発表）

●生徒への「高知県像」についてのアンケート結果発表

私たち生徒会は、高知をもっと元気にする提案を考えるために、高校2年生を対象にアンケートをとりました。その集計結果を発表します。

アンケート内容は「高知県の魅力」「中心商店街」「住みよい町」「龍馬ブーム」そして「高知県の将来」です。

【高知県の魅力】

高知のどんなところが魅力だと思いますか。まず「自然」について、緑が豊かであると一番に挙げる人が多かったです。その他に水質の良さを挙げる人もいました。

次に「食」について。やはり鰹が一番でした。この他にはフルーツトマトなどがありました。

3つ目は、「観光スポット」です。桂浜と高知城でワンツー・フィニッシュです。この他には、日曜市、ひろめ市場、アンパンマンミュージアムがありました。

4つ目は「特産物を使った産業」です。土佐和紙が一番になりました。ゆず食品、ごっくん馬路村などのゆず関連が全体の30%に上ります。この他には、鰹の一本釣、トマトなどがありました。

そして「その他の魅力」です。龍馬ブームもあって、坂本龍馬が一番でした。人柄が入っているのも興味深いです。その他は、日曜市、やなせたかしさんなどでした。

こういった高知の魅力をアピールしているか。その質問に「はい」と答えた人は58%でした。「はい」と答えた理由です。理由の多くは、テレビで龍馬伝をはじめとする高知県に関するものを見ているからということでした。「いいえ」と答えた理由です。PRが足りない、何をどうしているか分からないというのがありました。

「高知県に足りないものは何ですか」という質問には、若者が行きたくなる店が一番でした。この他には、イベント、PR力と答えた人もいました。この「活気」とすぐ1つ下にある「学力」は、特に重要な問題だと思います。この後のプレゼンテーションで生徒会は、これらの問題への解決策を提案する予定です。



【中心商店街】

次に商店街についてです。「あなたは中心街によく行きますか」という問いには、「いいえ」と答えた人が多く、64%でした。「いいえ」と答えた理由です。行く店がないといった意見や、時間的、距離的問題を挙げる人が多かったです。「はい」と答えた理由は、遊びや買い物に行くがー

番でした。

あなたが行きたくなる商店街はどのようなものですか。これには「活気のある商店街」と答えた人がかなり多かったです。先ほどの高知県に足りないものは何ですかという質問でも「活気」と答えた人が多く、活気を取り戻すことが重要な問題と言えそうです。

【住みよい町】

次に「住みよい町」についてです。高知県はあなた自身にとって住みよい町だと思いますかという問いには、「はい」と答えた人のほうが多く、76%でした。理由には、水や空気がきれい、身近に自然が多いなど、高知の自然の多さを挙げた人が多かったです。「いいえ」と答えた理由です。交通の便が悪いこと、田舎であることが上位に入っていました。このほかには、公共施設の少なさを挙げる人もいました。

高知県は高齢者にとって優しい町ですか、という問いは、「はい」と答えた人と「いいえ」と答えた人が、ほぼ同数でした。

【龍馬ブーム】

次に坂本龍馬ブームについてです。「土佐・龍馬であい博」に行きましたか。「はい」と答えた人は、7%でした。

「龍馬伝」を見ていますか。「はい」と答えた人は、40%でした。坂本龍馬ブームを感じていますか。「はい」と答えた人はかなり多くて79%でした。

次に龍馬以外にアピールできる人や物です。広末涼子さんとやなせたかしさんが同率首位でした。やなせたかしさんが生み出したアンパンマンも4位に入っていました。

【高知の将来】

最後に将来についてです。「あなたは将来どこで就職したいですか」に、県外と答えた人はかなり多く、77%でした。理由を見てみましょう。「やりたい仕事がない」が半数以上でした。県内で就職すると答えた人の理由です。高知が好き、暮らしやすいといった意見が多かったです。

先ほどの質問で県外と答えた人は、77%とかなり多かったです。将来ずっと県外で暮らす予定かというところではありません。68%もの人が、将来高知に帰りたいと答えました。「はい」と答えた理由です。高知で生まれ育った、老後に住みやすいという意見が多かったです。「いいえ」と答えた理由です。高知は田舎だからと言うのが一番に入っていました。この結果からすると、まずは可能性を求めて県外へ出て、老後は自然の多い高知でゆっくり暮らそうという人が多いように感じます。

●地域通貨について

私たちは先ほどのアンケート結果から高知を元気にするためのきっかけを探しました。するとこのようになりました。

1、高知県の魅力について。高知県に足りないものは何だと思えますかという問いに、321人中142人が「活気」と答えました。

2、中心街について。あなたが行きたくなる商店街はどのようなものですかという問いに、321人中58人が「活気のある商店街」と答え、一番多い結果となりました。

これらのことより、高知県を元気にするためには、活気を取り戻すことが必要であると感じました。

では、活気を取り戻すためにはどうすれば良いのか。私たちは、「地域通貨」の導入を提案します。まず、なぜ地域通貨の導入を提案したのか。それはアンケートに、高知の風土、人とのつながりが好きであるという意見が多数書かれており、高知の特色を生かすには最適な方法だと思ったからです。

地域通貨とは、その地域それぞれの特色を生かして作られた、地域で使える貨幣のことです。普通の貨幣とは違い、共同体の温かみが出る、お金の役割は持っているがお金でできないことをすることができる点で、今注目されています。私たちの地域通貨のキャッチコピーは、「ここでも、どこでも、高知なら」。人とのつながりと高知県ならどこでも使えることを強調しています。

システムについては3つあり、まず方法1は、中心街を主とした様々な場所で、例えば放置自転車の整備、プルタブ集め、イベント手伝い、河川清掃などのボランティアやマイバッグ使用などエコ活動をするとポイントがもらえ、たまったポイントにより店舗やサービスの利用に使えるという仕組みで、目的は、人と人とのつながりを作り、コミュニティの活性化を図ることで町に活力を取り戻すことです。

次に方法2です。ICカード「ですか」の進化系のようなカードを作り、それを一つ持っているだけでどこでも買い物ができ、乗り物にも乗ることができ、さらにポイントもたまり、それを加盟店舗での商品の割引、中心街でのイベントの参加費やオリジナルグッズに交換することができるのが方法2です。そのカードの情報は、携帯やパソコンのサイトで見ることができるようにし、またそのサイトからメールマガジンなどで情報を発信するという仕組みにします。目的は、高知市中心街に人を集め買い物をしてもらい、公共交通機関の乗車率を上げることです。

方法3の目的は、カードが他の市町村でも使えるようにすることです。各市町村に呼びかけ、観光地の入場料や土産物購入、特産物購入等にポイントを使えるように協力してもらいます。最初は方法1で始めて、さらに発展して方法2や3のシステムと統合し、地域通貨としてのカード

を作る予定です。

地域通貨のメリットとしては、お金と同じように使える利便性、カード一つあれば高知県内どこでも使えること。ポイントがたまるので得であること。流通が良くなること。企業としては地域の活動参加によるイメージアップやPRにつながるということが挙げられます。

デメリットは、1つ目は、カード作成の初期費用がかかることです。しかし、将来の利益を考えると、やむを得ないのではないのでしょうか。2つ目は、提携企業を探す必要があることです。これは、カードのサイトに無料で広告を出すという条件を付け、双方に利益が出るようにすれば提携してくれる企業は見つかると思います。3つ目は、店舗独自のポイント制度との重複です。これは難しい問題ですが、カードのポイント制度に移行すると、カードのサイトと連動したイベントに参加でき、店のPRもできるという条件を付け、店舗側に利益が出るようにすれば解決すると思います。

やはり特典がないとカードをほしいと思わないので、高知の特産品、地産地消を推進している商品を購入したり、よさこい等のお祭りの時期はポイントアップすることを特典とします。また、高知らしさを出すために、各市町村で違うポイント交換サービスを作りたいと思います。例えば、窪川は15ポイントで窪川ポークを使った肉まん1つ、四万十市は25ポイントで名産の青のり1瓶、室戸市は50ポイントでホエールウォッチング参加料半額と交換というように、高知県の魅力を存分に生かしたいと思います。

そして、このカードに親しみを持ってもらうためにイメージキャラクターを作りました。特産物戦隊土佐レンジャーです。カードの単位は「トサ」にしました。100円で1トサたまり、1トサは1円として使えます。左から「トサグリーン」、ピーマンをイメージしており、レンジャー界のアイドルです。「トサブルー・鯉マン」は、鯉をイメージしており、鯉の弓とにんにくの矢が武器です。真ん中「トサレッド・ハリマヤン」は、はりまや橋、帽子パンをイメージしており、原動力ははりまや橋を愛する心です。「トサイエロー・ゆう君」は、ゆずをイメージしており、いい匂いでみんなを幸せにします。「トサピンクのス・マキ」は、すまきをイメージしており、お腹がすいている子にすまきを渡します。このような感じで親しみを持ってもらい、かつ、有効利用してもらいたいと思っています。



最後に、私たちは地域通貨を導入すると、新たな人と人とのつながりができ、高知県内から活気を取り戻すことができると考えています。また、通貨を発行することにより経済が活発になり、他の県内の事業も盛んになることも期待しています。「ここでも、どこでも、高知なら」。私たちは高知県に地域通貨を導入することを提案します。

●県内留学について

まず生徒会が行った高知県に足りないものは、というアンケートの結果の中で321人中117人もの方が学力と回答しました。2009年度実際に行われた全国学力テストの結果では確かに全ての教科において、高知県は全国平均を下回っていました。そこで、どうすれば学力が向上するのだろうかと考え、「県内留学」の導入という案を思いつきました。

まず、県内留学のシステムについて説明します。行事が少ないと思われる6月と11月の平日に1回ずつ、合計2回、県内留学日を設けます。高校2年生を対象とします。留学先の学校の授業をそのまま受けることができます。また放課後は、クラブ活動に参加することもできます。

私たちが最初考えた案は、長期休みに1週間、中3生から高2生を対象とし、留学生専用のプログラムを組む。簡単に言えば、大学のオープンキャンパスの高校生版のようなものを考えていました。しかし、1週間もやると学校の負担があまりにも大きく、また、留学というのは本来自らが行き、その学校のありのままの雰囲気を感じ、そして吸収するというのが目的であり、専用プログラムを作ってしまうとは留学の意味がないということになり、その結果、平常授業こそが一番いいという結論になりました。

また、平常どおりの授業でも、将来を考えるいい機会になると思っています。例えば、我々学芸生のような普通科の生徒が農業高校、工業高校のような実業科に留学するとします。農学部志望の生徒が農業高校で農業体験をしたり、工学部志望の生徒が工業高校で学習をすれば、将来の仕事のイメージを具体的に確かめることができると思います。我々、学芸生は知識ばかりを詰め込む傾向にあるので、これは非常にいい機会になると思います。

また高校によって、教科書や学習の進度が全然違うのではないかという質問も出ました。教科書は留学先にコピーを準備してもらい、また進度の差はそれを知ることで大きな刺激を受けることができるのではないかと思い、大丈夫だと判断しました。

新聞やニュースを通して、現代の若者の多くが、初めての職場になじむことができず、早々に職を辞してしまうという現状があることを知りました。大学卒業生の3分の1程度の方は、3年以内に職を辞してしまうということです。ですから、社会に出る直前であり、受験までにまだ余裕もあり、将来の自分についてゆっくり考えることができる高2生を対象にしました。

この県内留学の目的は、自分にとって未知の環境を見ることにより、外部からの刺激を受け、知的好奇心を持ってもらおうというものです。なぜなら、人間が勉強しようと思うときは、少な

2009年度 全国学力テスト(中3)の結果

平均点	国語A	国語B	数学A	数学B
高知県	74.2	69.8	56.5	49.7
全国	77.4	75.0	63.4	57.6
全国との差	3.2	5.2	6.9	7.9

*4月21日実施分のみを集計です。

からず外部からの刺激を受け、知的好奇心を持ったときではないかと思うからです。

最後に、私たちは学力向上に必要なものは、学びたいという積極的な姿勢、それを行動に移す機会だと感じました。今回の県内留学の企画が絶好の機会になるのではないかと思うので、是非、検討してみてください。

●エンジョイ高知スポーツフェスティバル

私たちはアンケート結果にあった高知の魅力として、誰もが感じている「自然がいっぱい」という点に着目し、この自然を存分に利用し、また楽しんでもらう企画を考えました。それが「エンジョイ高知スポーツフェスティバル」です。

これは、2つの部門に分かれています。1つ目は、高知の豊かな自然の中で真剣にタイムを競うトライアスロン龍馬杯です。桂浜を出発点とし、安芸郡田野町をゴールとします。

まず、桂浜の龍馬像の前で開会式をします。選手宣誓は、龍馬像に向かってしてもらいます。そして、桂浜からスイムをスタートします。沖に設置されたブイを回って帰る1.5キロのコースです。そしてその後、自転車に乗り換え、風光明媚な海岸線を通って、一路安芸まで向かいます。安芸の野良時計の前をルートに入れると良いと思います。

安芸から田野町まではマラソンです。疲れた体をさわやかな潮風が後押ししてくれることでしょう。ゴールの田野町では、参加者をよさこい鳴子踊りでお出迎えします。入賞者への副賞には、ペアで2泊3日の高知の旅ご招待をはじめとして、県産品をふんだんに使います。

ゴール後は、奈半利川沿いにある二十三土温泉で疲れを癒してもらい、夜は奈半利川の河原でバーベキューをして、参加者全員で健闘をたたえあい、和気あいあいと土佐のおきやくを楽しんでもらいたいと思います。もちろん、鰹のタタキをはじめ、高知のおいしい食べ物を忘れてはなりません。その盛り上がりを通じて、参加者やその家族の皆さんは、高知のよさを胸に刻みつけてくれることでしょう。

もう一つの提案は、タイムを全く競わずに高知の自然を満喫してもらう「龍馬ママチャリラリー」です。これは、参加者全員がママチャリを使って、高知城から安芸までツーリングするもので、石川県で実際に行われているツールド日本海ママチャリラリーを参考にしました。

このよさは、自分の足で自転車をこぐことによって、車で通り過ぎるだけでは気づかなかった町のおいや潮の香りなどを新たに発見できることです。ルート途中には、道の駅などを使って休憩やレクリエーションを兼ねた関門を設けます。

開会式は、高知城下、板垣退助像の前に集合し、参加賞として配られたおそろいのTシャツを着て行きます。そして、準備運動を兼ねて、よさこい鳴子踊りを参加者全員に覚えてもらいます。これは、夜の慰労会でもう一度踊ることになります。その後、第1関門の日曜市に全員で繰り出

します。日曜市では、鰹のタタキに使う鰹以外の材料を仕入れてもらいます。

というのもゴール地点で、参加者全員に鰹のタタキ作りをしてもらうからです。「鰹のタタキを作るには、どんなものがいりますか」などと、道行く人やお店の人に聞きながら、大根や玉ねぎ、ネギやミョウガ、ミカンやブシュカンなど必要と思われるものを集めます。

ここでのやり取りで、土佐弁の面白さや、人の温かさなどに触れることができるのではないのでしょうか。買い物が終われば、それを持ってママチャリでスタートです。

次の関門は、南国道の駅です。そこでは、土佐和紙作りを体験してもらいます。作るのは、葉っぱを漉き込んだ手作りハガキ。もちろんこれは、後日、参加者に送ります。その後、海岸線沿いのサイクリングロードを使い、東へ向かいます。



そして3つ目の関門は、夜須町の道の駅「ヤ・シィパーク」です。ここにはバーベキューサイトもあるので、グループごとにバーベキューで昼食を取ってもらいます。天気がよければ地引網漁をしてもらってもいいと思います。

さて、腹ごしらえが済んだ後は、一路安芸に向かいます。安芸では、いったん町中に入り、土居廓中（どいかちゅう）や野良時計などの歴史的町並みを楽しんでももらいます。ここまで来れば、安芸駅前の地場産市場のゴールは目前です。

最後の関門は、この地場産市場での鰹のタタキ作りです。参加者全員に実際にわら焼きタタキを作ってもらいます。仕上げは、朝に日曜市で買ったものです。それらを使い、おいしいMYタタキを作ってお皿ごと持って、ゴールテープを切ります。

その後は、ゴールした人から土佐のおきやく開始。日本一の出荷量を誇る安芸のナスをはじめ、地元の食材をふんだんに使った料理に舌鼓を打ってもらい、宴会を楽しんでももらいます。

以上が、僕たちの考えた高知の自然を満喫してもらう企画、「エンジョイ高知スポーツフェスティバル」です。

4. プレゼンテーションに対する知事のコメント

【エンジョイ高知スポーツフェスティバルについて】

知事： いずれの案もよく考えられていますね。それぞれかなりいろんな可能性があるんじゃないかというふうに思いました。ところでなぜトリアスロン坂本龍馬杯にしようと思ったんですか。

生徒： スポーツをしながら、ふと見た景色がきれいだったりして、「ああ、高知のここすごいな」

みたいに思っただけだと。

知事： そうですね。ちなみによく何とかマラソンってあるでしょう。四万十川でも毎年マラソンをやっているんですよ。マラソンって実はすごいらしいです。どういうことかと言うと、マラソンやる人は、全国のいろんなマラソン大会を行って回るらしいです。トライアスロンなんかでもそう。だから、リピーター、固定ファンが着くことによって、県外の観光客の皆さんが来てくれるということもあるかもしれません。実は、ポスト龍馬博に向けて、龍馬マラソンはどうだろうというのが、一つの有力な候補になっているんですけど、トライアスロンで、こんなふうに高知のいろんなところを見てもらったりするのも楽しいかもしれませんね。

いずれにしても、このトライアスロン龍馬杯、龍馬ママチャリラリー、どちらもなかなか面白いと思いました。自然をずっと見ていっていただきながら、単に競うだけじゃなくて、途中、途中にいろんな観光地を入れて、さらにママチャリラリーのほうは体験をいろいろやっていくということでもんね。これは一つ、グッドアイデアだと思いました。来年に向けていろんなアイデアを募集しているところなので、もしかしたら参考にさせていただくかもしれません。

でも、大人が理屈っぽいことを言うような感じになって恐縮ですけど、是非こういうことを考えてみて欲しいと思います。これに多くの人を引き込んでいくためには、どういうことをしなければならないでしょうか？ これを本当に実現していくためには、例えばどういう人のどういう協力があるだろうかっていうのも是非、考えてみてください。面白いアイデアだと思うけど、それを実現していく過程は、大変なんです。

例えば、桂浜から沖に向かって1.5キロのブイまで泳いで帰ってくるといっても、桂浜は遊泳禁止区域でしょう？ あそこで1.5キロ先のブイまで行って帰ってくるができるのか。どうもこれは警察が許してくれそうにありません。それなら次の候補地はどこにする？ ということを考えなくてははいけませんよね。このトライアスロン、ママチャリラリーを本当に実現するためにはどうすればいいかっていうことを1個、1個練っていく過程で、その難しさがたくさん出てくると思います。それを是非考えてみてください。

これと同じような苦労を大人でもするんですよ。京都に坂本龍馬さんと中岡慎太郎さんのお墓があるでしょう。その京都の一番の繁華街の河原町、高知でいうと帯屋町みたいなところで、よさこいをやらないかという計画があります。元々、龍馬さんのお墓の前の霊山神社の境内でやっていたのですが、高知のよさこいの一番のよさは練りをやることじゃないですか。練ってずっと行列になって動いていくこと。あれを是非京都の人にも見てもらい、高知県の強力なPRにしたいと考えています。けれど、商店街を練り歩くとなると、河原町の通

行を止めないといけません。警察がこれを許してくれるか、もっと言えば、これで通行上の障害が起きないかどうかということが一番のネックになっています。

アイデアはすごく面白いと思う。けれどいろんな関係者を、巻き込んでいかなきゃいけません。いろんなことを考えてみてください。私もスポーツ系でこういうイベントを是非考えさせてもらいたいと思います。ありがとうございました。

【県内留学について】

知事： 「県内留学」についてですけど、私は正直なところ、最初の案のほうがいいのではないかと思ったんだけど、やはり学校の負担が大きいと先生に言われましたか？

生徒： はい。

知事： そうですか。この県内留学は、要するにこういうことですか？ 例えば、普通科の生徒が、農業高校に行って体験したり、農業高校の生徒が普通科に行っているいろんな勉強したりという、そういう交流を県内高校でできるようにしたらいいのではないか、ということですか。

生徒： はい。

知事： なるほど。確かに面白いかもしれません。先ほど、一次産業の担い手が少ないという話をしたでしょう。一次産業に就こうとする若い人はすごく少ないんです。だけど、若い人たちに農業体験とかしてもらってアンケートをとると、ものすごく好評なんですよ。やってみるとすごく楽しかったという人が多い。

それから林業なんかでも、木がバーンと倒れていくときの感触がたまらんとか言って、病みつきになったりする人がいるぐらいなんですよ。

そういうやってみると面白いという人がいることもあり、一次産業の担い手を確保するため、中学生や高校生にできるだけ林業体験、農業体験してもらいましょうと、一生懸命取り組みを進めているんです。だけど、この県内留学はそれだけにとどまらず、お互い、例えば工業高校のところに勉強に行ったら、工業について勉強しようとかそういう相互の交流ができるようにしましょうということですね。もしかしたら、教育の点において、ものすごく役に立つかもしれません。進度の差の問題を心配しておられたようだけど、相互にお互いに体験するってということからすれば問題ないのかもしれません。英語の何々について教科書を読みましようとか、そういうことをするわけではないでしょう。だとすれば、面白いかもしれないなと思いましたね。

1つだけ学力向上について話をしたいと思いますけど、やっぱりアンケート調査をしたら321人中117人が高知県に足りないもの、「学力」と回答しました。

高知県で学力テストを、平成19年、平成20年、平成21年度と3年間実施し、全国で

ずば抜けて低い46番だった。最初の年は私立学校にも参加していただきましたが、私立学校を入れても46番は変わりません。体力テストも、全国で47番だった。いじめ、不登校の出現率は全国ワースト1位、47番でした。したがって高知県は「学力」のみならず、教育自体をどう良くしていくのかということが、全県的な大きな課題なんです。だけど、今良くなりつつあるのも確かです。

ですが、学力をつけるっていうことはどういうことでしょうか。すごく並大抵なことではないだろうなと私は思います。そんなに簡単に勉強ができるようになるわけではない。だけでもっと言えば、何を勉強したらいいのか分からないというのが、一番難しいところじゃないかなと思うんです。

僕は、高校3年生ぐらいのときは、真面目に座って話を聞いたりするようなタイプではなく、こういう時に寝ていたりとかするような高校生でもありました。高校生のとき、あまり物事に一生懸命取り組もうとしてなかった時期があります。それで、もの見事に失敗して、浪人して、青色吐息で必死になって勉強して、何とか大学とか行くこともできました。むしろ大学になって、社会人になってからのほうが、もっと勉強するようになりました。当時、僕が一番苦しかったのは、何を勉強すればいいのか分からないというところだったと思うんです。

社会人になれば、いろんな問題を解決していく、新しい企画を練っていくために自分で課題を設定して、それに向かって自分で答えを見つけていくことを徹底してやっていかないといけません。それを自分でやらないといけないけど、それに向かってどのようにして勉強するのかということ、それ自体を学ぶことが、今、中学校、高校生の時代には一番大きいことなのではないかと思います。それが身につけていると、大学生になっても、社会人になっても自分で学習していくことのできる、いつまでも伸び続けることのできる人間になれると思うんです。

学力の問題に関して取り組んでいるのは、中学生、それから小学生にそのような力をつけてほしいからです。今、小学校4年生から中学校3年生ぐらいまで算数、数学で、必ず毎日、授業中もしくは放課後に勉強できる学習教材を子どもたちに渡すようにしています。それから、国語についても、この4月ぐらいからそういう取り組みを始めるようにしています。学力の問題を解決するには、毎日しっかり勉強し、そして、その分からないことを1個、1個身に付けていくことが必要だと思います。その積み重ねなんだろうと思っています。

一昨年までは大変でした。30分未満しか勉強しませんという子どもの割合が、高知県は全国平均の2倍あった。高知市は3倍だった。けれど、去年の学力テストの段階からそういう調査をすると、全国平均並みまで改善をしました。さっき言ったような形で、少しずつ宿

題とかやるようになってきたから、だんだんよくなっているんです。取り組みを進めればよくなっていきますが、高知県内全部で学力を上げていくということは簡単なことではありません。

そういう意味において、私はこの県内留学の制度は学力向上というより、たぶん視野を広げるために、自分が日ごろ経験したことのないことをいろいろ学んでみる、実地で体験してみするために、もしかしたら有効な制度なのかもしれないなと思いました。

県内留学には、学力向上以外で他にねらいはありましたか？

生徒： さっき知事が言ったとおり、視野を広めるという目的はあります。

知事： では、学芸高校の皆さんはどのような体験をしてみたいと思いますか？ 大学とか行って、ちょっと1日、2日勉強してみたいと思う人はいませんか？

もしかしたら高校生の皆さんにも、大学でオープンキャンパスをやる機会が県内で増えると、勉強になっていいかもしれませんね。そんなこともいろいろ考えていきたいと思います。

【地域通貨について】

知事： そして「地域通貨」について。これは非常に面白いですね。これはモデルは何を考えましたか？ 「ですか」がモデルになっている？ それとも、それぞれの地域共通の商品券とかそういうのですか？

生徒： 最初は普通に1千円札とか5千円札のように、お札の形で作りたと思っていましたが、「ですか」というカードができていたので、それを有効利用できたらいいなと思って、カードにしました。

知事： これターゲットは県内の人ですか、それとも観光客の皆さんですか。

生徒： 今のところは県内の人に使ってほしいなと思います。

知事： 県内の人に使ってもらうのは面白いかもしれません。「ですか」を始めてから、土電の乗客数が増えたらいいです。あれを地域の商店街で使えるようにし、ポイントとか付くようにできないかというお話もあります。だけど、それをやるには、ここでデメリットとあったように初期費用などもかかるので、まだ最終的な結論は出ないでいます。だけど、高知県で地域の通貨を作るのは、2つの意味において面白いと思います。

1つは地域通貨を使い、地元で物を買ってもらうことで地域を元気にできるのではないかと思います。結果、中心商店街を元気にすることができればいいと思います。

もう1つは、いわゆるクラブ会員や仲間をつくることのできるかもしれないという点です。地域通貨を商品券ではなくカード方式にすることで、誰が登録してくださっているかって分かることができれば、その地域の商店街のイベントの情報をお送りすることができるように

なるかもしれません。うまく他のツールやシステムを組み合わせることができれば、いろんなことができるのではないのでしょうか。

この地域通貨は、中心商店街を元気にするっていうだけではなくて、観光客の皆さんにも使ってもらったり、それから例えばアンテナショップへいらっしゃった方たちにこのカードを使ってもらうなど、高知県が好きだという人のためのカードみたいなものを作って仲間にしていくという、そういうやり方もあるかもしれませんね。いろいろ可能性は広がってくると思います。

最後にゴレンジャー。緑と、ブルーは鯉で、レッドははりまや橋で帽子パン。イエローがゆずで、ピンクがすまきですか？

生徒： はい。

知事： 帽子パンは県外でもものすごく売れているのを知っていますか？

生徒： はい、有名ですよ。

知事： 帽子パンは、県産品フェアで東京へ持って行ってものすごく売れるんですよ。東京の丸ビルに持って行って売ったときも、全部午前中に売り切れたりとか、大人気なんだそうです。そういうものを買ってくれた人に、あのカード渡して、その人にポイントを付けて、今度高知に来てくれたときには、ここで何かを安く買えますよとかやったりすると、いい仲間作りができるかもしれませんよね。

いずれも、今日のアイデアは面白いと思いました。何かの形で出さしていただければと思いました。

【アンケートについて】

知事： 最後に、アンケートについてお話をさせていただきたいと思います。

まず、「土佐・龍馬であい博」に行ったことがある人が7%しかいなかった。少ないなあ。もっとアピールが必要だと思う？ 高知県のPRをするために、まず大切なのは何でしょうか。

生徒： テレビやネットなどの媒体を通して、もっと全国の人が高知の魅力を見ることができるようになることだと思います。

知事： そうですね。でもゴールデンタイム30分間番組を流すと、どれくらいお金がかかるか知ってる？ 場合によったら3億円ぐらいかかるんです。それはなかなかお金で買えませんね。だから、一番いいのは取材してもらうことです。今日もマスコミの皆さんおいでになっていますけど、取材してもらって、タダで放映をしてもらうことが一番いいです。

実は高知県でも、BS放送で番組を買ってPRをしています。そしてもっと工夫して、B

S番組で撮った映像を生かして、他でもいろいろと放映できるようにしたりとかしているんですよ。

だけど、もう1個大事だと思うことがある。自分が高知県のことをよく知っていないと、人にPRできません。県民の皆さんそれぞれ、高知県のことをよく知っているということが非常に重要だと思うんですよ。

だから、「土佐・龍馬であい博」に限った話ではなく、もっと高知をPRしようとするときに、このことについては私は負けないというものを作るように頑張ってみてください。

高知県のことを知らないで、高知県のことをPRしようと言っても、それはできない。だから是非、皆さん自身、高知県のことを、今後も学び続けるように頑張っていたいただきたいと思います。

もう1個、アンケート結果で非常に興味深いなと思った点について。高知県が住みよい町だと思う人76%って、本当にこんなにたくさんいた？

生徒： はい、いました。

知事： これはありがたいことです。ただ、就職するときは、県外に行ってみたいという人は結構多いんですね。それは仕事がないとかってということもあるかな。県外で仕事をしたいのは、高知県内で仕事がないからですか？ では、どういう条件が揃うと高知県に若い人は残ると思いますか？

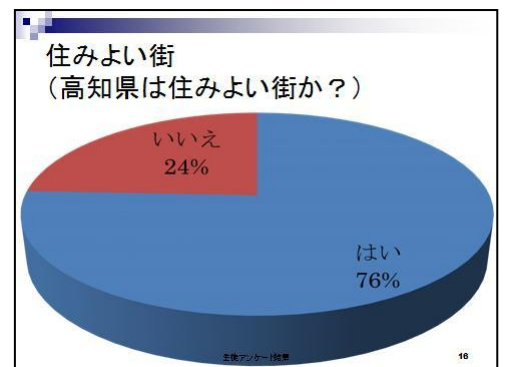
生徒： 企業をいっぱい作って、就職できるようにすればいいと思います。

知事： そうですね。こここのところがすごく大切なんだと思います。だから我々、大人たちは一生懸命皆さん若い人たちのためにも頑張らないといけないというふうに思います。

高知県の名目GDP、一人当たりのGDPは、全国平均の7割しかないんです。7割しかないということは、どういうことか。別にそんなに暮らしに困るほどのレベルじゃない。だけどよく言われるのは、デート行ったりするときに、高知県はドライブしかすることがありませんとかね。東京だったら、いくらでもいろんな選択肢があるけど、田舎で経済が小さいということは、選択肢が少ないということです。だからもっと経済の活動を活発にしていけることが大事だと思います。

だけど、高知県が東京のような都市を目指すことがいいのかどうか。それについてはまた別の考え方があるのではないかと思います。若い皆さんはどう思われるか分かりませんが、年を取るに従って考え方も変わってくると思うので、目指すべき高知県の将来像っていうのはどういうものなんだろうかということをして是非、今後も考えてもらいたいと思います。

住みやすいと答えた人が76%。東京でアンケートとったら、こういうことになるかな。



それを如実に表している数字があります。出生率です。1人の女性が生涯何人子どもを産むかという数字。この出生率が2.2をちょっと越える数字であれば人口は減りません。今、日本全国の出生率は1.3ぐらいです。高知県は1.3と全国平均です。東京は、1ぐらいしかない。全国平均の7割から8割しかありません。要するに、子どもを産みやすい場所ではない。また教育費も高い。それから、そもそも暮らしが、便利なようで電車がなければ移動できない町だから、あっちこっち地下をベビーカーを持って上ったり下がったりしないといけない。私も東京で暮らしていて、子ども2人を育てましたが、いつも階段をベビーカーを持って上って下がって大変でした。

例えば食べ物でも、同じトマトでも高知で食べるトマトのほうがすごくおいしいでしょう。住みやすいというのは、人間が人間として生きやすい、生きるためのいろんな条件がたくさん揃っているところであり、高知県のようなところでもあるんだと思います。

都市型の暮らしを求めることも、一定必要な部分もあると思いますが、高知県は、高知県の持っている自然、さっきアンケートにもあった食、それから結果として生じる暮らしやすさを、どんどん伸ばしていくことが大事なのではないかと思っています。あとは、高知県には他の県、同じ田舎の県の中でも特に歴史のいろんな遺産もあります。それからよさこい。高知県発祥で、今や全国220箇所で開催されているよさこいは、いろんな人のアイデアが湧き上がってきて作り上げてきた素晴らしい文化です。

高知県はいろんなよさを持っていますが、その将来像をどう考えていくか、是非、皆さんそれぞれの感覚で、また、外に行かれる人も、高知県の中に残られる方もそれぞれの考えがあると思います。いろんなところでいろんな経験をしていく中で、考えが変わられることもあろうかと思っています。ですが、高知県みたいなの所の将来像がどうなっていくかということについて、ずっと考え続けていただきたいと思います。

6. 閉会

生徒： 私たちはこの座談会を通じて、初めて高知について真剣に考えました。最初は、自分たちが高知を元気にできるなんて思っていませんでしたが、話し合いを続けていくうちに、自分たちが高知を元気にしていくんだという思いが出てきて、熱が入りました。

今日は、尾崎知事をはじめ、職員の方々が、日々懸命に高知のことを思ってお仕事をなさっていることをとても感じました。また、話し合いをしていく中で、私たちも高知県の発展に貢献していきたいなと思いました。今日はありがとうございました。

知事： 今日は、本当にいい発表を聞かせていただきました。非常に質の高い発表で、本当にい

ろいろ参考になるところありました。ありがとうございました。

それから、今日の私の話は、結論のある話ではないし、それぞれの考え方があると思います。でも自己実現することを一生懸命に考えると共に、高知県、もっと言えば日本、世界をどうするかと、自分以外のことを、高校生のうちから考えておられる皆さんはご立派だと思います。その点をますます伸ばして行ってもらいたいと思います。

私自身も、本当に勉強になりました。これからも高知県を元気にするために、一緒に頑張っていきましょう。どうもありがとうございました。